ラボアジェを失う

昭和六十三年十月二十三日は生涯忘れ得ない日となった。日曜日の夕刻、突然の訃報に暫し茫然自失の状態で号泣、二時間後になきがらに接して再び慟哭するを制し得なかった。年令相応に父親の死を含めて数多くの人生の終焉に冷徹に立会ってきたつもりの自分に、かくも熱い感涙の残っていることを認め得たことは貴重ではあったが、その代価は余りにも大きかった。

未廣君との最初の出会いは、昭和五十一年の春、東京大学大学院工学研究科修士課程修了後三年間を過ごした旭化成から繊高研に移られ、研修で僕のところを訪ねられたときのこと。生意気そうな奴というのが周囲の評であったが、誕生して間もないウィスカーの話を真摯に聞いて呉れた。そして短時間の会話の中に旺盛な知識欲と卓抜な理解力の片鱗を覗かせて呉れたのを思い出す。化学工学専攻の君は、人体機能代行システムの研究を担当すべく第一部の生体機構システム研究室へ配属され、一時期のかけ持ちを経て五十六年度からは第四部のエネルギー変換プロセス研究室に移られた。

本格的に君を知るようになったのは、僕の研究企画官補の任期が明けた五十四年の正月、ウィスカー作りを僕の趣味の領域に留めておいては駄目だと言って加勢に乗出して呉れてからだった。君の描いた量産化プロセスの構想自体、見様見真似、手探りで化学実験を覚えてきた僕には極めて奇抜なものにも映ったが、君からは僕の発する質問に恰かも予め準備されていたが如く次々に明快な答が返ってきた。君の瞬間的な判断力は、僕の人生で巡り逢った多くの明晰な頭脳の中でも抜群のものだった。引っ越し準備で慌ただしくなった横浜の四号館の片隅でワークショップ仕事が始まったが、君は教えることにも長けていた。君の弟子となった僕にアルミ板の切断からネジ締めまでの技を伝授する過程で、相手に工夫させる、相手を褒めるといったつぼも心得ていた。モノマー溶液の乾燥にクロマト式のカラムを使って見ようという新奇のアイデアは程なく有用であることが確かめられた。

筑波に移転後は幸運にも君と実験室が向かい合わせとなり、お付き合いが深まった。ウィスカーの仕事はソニーとの共同研究も本格化し、やがてスピーカーコーンとして日の目を見ることになったが、君の貢献はハードウェア装置の製作に留まらなかった。結晶成長の基本とも言うべき核生成の制御やポリマーとの複合化に斬新な知恵を提供されたのはもとより、振動版の設計に音響の専門家とも対等のディスカッションが出来る才能の幅は君に固有のもので、君の人柄とともに会う人を魅きつけた。科学技術長官賞が究極的に代表者受賞となったのは快くない思い出だが、君は却って優しく慰めてくれた。

一方で君は、多くの人の関心が他に移った後も人工臓器の仕事を強固な責任感を持って続けられた。隔膜を持つ経路内での流れ分配の原理は君の発見によるもの、理論解の実証に向けて、土曜日の午後もひたすらモジュール試作に打ち込む姿には献身の雰囲気すらあった。

その間、昭和五十六年度には次世代制度の立上げの時期に工業技術院に併任された。行政あるいは民間との調整に苦悩され、御本人には不本意の期間ではあったろうが、飾ることのない態度で研究所と行政との相互理解に尽くされた君の功績は今も霞が関で語り継がれており、近年の協調ムードも君の功績に負うところが大きい。

最近までの数年間における君の活動は皆んなの記憶に新しく、「高効率合成繊維製造プロセスに関する研究」における多目的重合装置の試作、「バイオリアクター研究開発」における装置開発等の成果は、遺産として目に触れることができる。ただし、心に触れるという意味で、君のロマンがこれらの場合も具体的なかたちより寧ろコンセプトにあったことは銘すべきで、その趣旨は図らずも絶筆となった要覧の原稿に留められている。研究所内外の他の人の仕事への大いなる関心と理解は君の豊かな思い遣りの心を以ってしてのもの、論評はしばしば辛辣を極めたが常に公正で自分の貢献の可能性を考えてのものであった。

君の回りには人が集まった。僕自身、四階の仲間を中心に共同の仕事以外でも一緒に時を過ごすことが多かった。話題は科学、技術や研究所内外の諸問題に留まらず歴史から地理、文化に至るまで、また社会情勢から政治、経済に至るまで、凡そ人生で語られることの全てに渡り、会話が深夜まで続くことも稀ではなかった。君の博識は恐らく全巻の百科辞典を超えるものであったが、それは単なるデータベースではなく、自分のものとして消化され、常に最新の知識と自分の考えを参照して更新されていた。語彙の豊富さ、比喩、例示の上手さは君の話の真骨頂で時に相手を面食らわせたが、尋ねれば面倒がらずに解説して呉れた。知識と英知と人道主義！　君の得意を真似てラボアジェを失ったと言ったら君は苦笑するだろうか。

十月に発足した新組織の将来へ向けて、君への期待が如何に大きかったかは君も知っていた筈だし、企画へも幾つかの提言を呉れていた。僕個人への最後の忠告は亡くなる一週間前の「時には井口美学を捨てろ」であった。

無念

（井　口）